

午後Ⅱ試験

全問に共通して、具体的で、経験に基づいて記述されていることをうかがわせる論述が多かった。一方で、問題文の引用で文字数を費やし、結果的に期待した内容が書かれていない論述や、問題文に例示した項目と一般論の組合せだけで構成された具体性に欠ける論述も見られた。問題文に記載した項目は事例として挙げたものであり、転記を求めているものではないことを理解してほしい。

また、設問で問うている内容に対応しない論述も散見された。例えば、“対象業務の概要及び特徴”を問うているにもかかわらず、“プロジェクトの概要”や“システムの概要”を述べているような論述が挙げられる。このような論述では、受験者の能力や経験を正しく評価できない場合があるので、実際の経験に基づき設問に沿って具体的に論述してほしい。

問 1（業務の変化を見込んだソフトウェア構造の設計について）では、“業務変化によってシステムが受ける影響”、“ソフトウェア構造の面からの設計”、“業務変化に対応できる理由”、の三つについて、関連付けて論述することを期待したが、そのような論述は少なかった。

多くの受験者が、“想定した業務の変化”に対応するソフトウェア構造ではなく、設定値をテーブル化するなど“汎用化のためのプログラミング方法”や販売管理システムにおいて商品の種類が増加することなど、“当然考慮すべき業務要件やデータ量の変化”に対応するソフトウェア構造について論述していた。また、“どのようなソフトウェア構造を設計したか”と問うているにもかかわらず、“柔軟性を持った構造にした”などの論述にとどまり、具体的なソフトウェア構造に触れていない論述も見られた。

業務の変化が激しくなっている状況において、業務を踏まえてソフトウェア構造を設計する能力は、システムアーキテクトとして特に必要とされるものである。その重要性を理解し、実践してほしい。

問 2（障害時にもサービスを継続させる業務ソフトウェアの設計について）では、サービス継続の方針に基づいて、サービスを継続する処理と、継続運用を可能にするための業務ソフトウェア設計について論述することを期待したが、そのような論述は少なかった。多くの受験者が、問題文で除外しているにもかかわらず、機器やデータベースの二重化など業務ソフトウェア面以外での対策について論述していた。また、“継続運用に備えた処理や障害復旧処理においてどのような工夫をしたか”と問うているにもかかわらず、“継続運用を可能にするための設計”に関する工夫を記載している論述も散見された。

システムは、常に正常に稼働しているとは限らない。システムアーキテクトとして、システム障害時の業務も想定した設計を心掛けてほしい。

問 3（組込みシステムの開発プロセスモデルについて）では、具体的な経験をうかがわせる論述が多かった。論述されたプロセスモデルについては、プロトタイプングモデルでの開発が多く、ユーザインタフェースを重視する具体的な開発状況を読み取れた。また、システム開発時の品質管理を重視する立場から、ウォーターフォールモデルを採用した論述も散見された。一部の論述では対象が組込みシステムではないものがあり、これは出題の趣旨から外れると判断した。